

随 筆

私の足となってくれた車

前越 久

私が自動車の運転免許を取得した時は昭和52年11月11日と免許証に記載されている。42歳の時であった。当時の自動車学校で使用されていた教習車はまだオートマチック車ではなかった。最後の実技試験も全行程全てうまくいき、バックをして車庫へ入れたまでは良かったのだが、どういうわけか停止位置を修正しようとしたのか記憶にないが、バックギヤーのままアクセルを踏んだため勢いよくバックして後方の土手にぶつかってしまった。助手席の試験官が「馬鹿だね！せっかくだけうまくいったのに」と云って不合格にされてしまった。その後38年が経過するが、バックするたびに今でもこの不合格の瞬間のことが頭をよぎりギヤーチェンジの確認を特別慎重にするという習慣が身についたように思う。まもなく80歳を迎えようとしているが5年ほど前に駐車違反を1回やってしまいブルー免許証である。残念ながら無事故無違反と胸を張って自慢することはできない状況にある。

五体満足な健康な人たちならば運転免許を取得したことなど、この「健康文化」誌の題材にはならないだろうが、私の場合は足に障害がある者の例として書かせてもらうことにした。私は昭和10年（1935）に生まれ、4歳の時小児マヒに罹患したため尖足といって右脚の踵（かかと）が地面につかず歩行が困難であった。右脚がマヒしていたため足関節に力が入らず、とても車のアクセルやブレーキのペダルを踏める状態ではなかったし、これらのペダルを機敏に踏み変えるような動作もできなかった。24歳の時、脊髄性小児マヒによる障害を少しでもよくしてやろうという名古屋大学医学部附属病院の一整形外科医との出会いがあり、右足関節を90度に硬直してブラブラの足関節を固定する整形手術を施行して頂くこととなった。約1年の闘病生活の後、足関節の機能は失われたがある程度の脚力を取り戻すことができるようになったのである。この手術に関する詳細は「健康文化」第21号に「病気の問屋」と題して寄稿している。また「健康文化」第48号に「経口生ポリオワクチン」と題して当時名古屋大学理学部准教授であった木藤伸夫先生が寄稿されており、私が不幸にして4歳の時小児マヒに罹患した原因を探ることができた。すなわち、日本でポリオ

の症例が初めて発表されたのは明治43年であり、その後10年ごとに流行し、昭和13、15年に京阪神地方でポリオの大流行が起こり日本でも目立つ流行病の一つになった、と記載されていた。私は神戸生まれであり7歳まで現在の神戸市中央区（当時は葺合区熊内町）に住んでいたなのでこの記述と一致していることになる。この時ポリオウイルスにつかまってしまったのだと納得？したところである。昭和24年の大流行では死亡率が34.3%であったとも記載されており、罹患した患者の3人に1人は死亡するという怖い伝染病であった。また平成27年9月4日(金)22:00からNHKのファミリーヒストリー「丹波義孝・哲郎との絆」という番組を視聴して初めて知ったことであるが、俳優丹波哲郎氏の奥様である貞子さんが息子の義孝さんが3歳の頃、昭和34年のある日小児マヒに罹患し突然歩行が出来なくなってしまい、車椅子生活を余儀なくされることになったとのことであった。当時は大人でも感染したらしく、後遺症は小児の場合より重篤であったようである。このような悲惨な状況を知るにつけ、発病から幼、小、中、高卒を経て20年余の間苦労はしてきたものの車の運転まで可能になった自分自身は不幸中の幸いであったと思うと同時に幸運にも困難な整形手術による医学の恩恵を受けることができたことは現在においても感謝、感謝の気持ちで一杯である。

昭和62(1987)年7月から3か月間、文部省短期在外研究員としてアメリカ合衆国食品医薬品局(FDA: Food and Drug Administration)へ医療用X線スペクトル測定に関する研究目的で留学することとなった。元シカゴ大学放射線科教授(現在、シカゴ大学名誉教授)としてご活躍しておられた土井邦雄先生にFDAのRobert J. Jennings博士を紹介して頂き生まれて初めての、しかも一人での海外生活が始まった。はじめの1週間は、立派なバス、トイレ、キッチン付きでリビングと寝室は別室になった高級なアパートに入居した。これはあらかじめFDAの方で予約して頂いていたものである。しかし官費留学生にしては贅沢すぎると判断しFDAの同僚に相談してホームステイを探してもらった。同僚の知り合いの家で、バス、トイレ、ベッド付の12畳ほどの1室で、冷蔵庫とTVはあったが、炊事、洗濯などは自分でやらねばならないという、要するに下宿生活が始まった。一番困ったのは朝、晩の食事である。食材の確保を如何にするかであった。FDAはワシントンから北へ30kmほどのTwinbrook Parkwayという田舎風の町に在り、下宿の近くにはスーパーや郵便局などは全く見当たらず、同僚の車であちこち案内してもらったところ、これは車なしでは生活ができないと悟ったわけである。ここで役に立ったのが車の免許証であった。あらかじめ

めアメリカ合衆国でも通用する国際免許証を日本で発行してもらい持って行ったのがよかった。クライスラー社製の小型車をレンタルして 利用することにした。記憶は定かではないが賃貸料は1か月\$200位ではなかったかと思う。当時の為替レートはこれも定かではないが¥220~250位であった。とにかくガソリンはかなり安かったし、通勤と買い物くらいの利用なら誠に経済的な便利な乗り物でありかつ私の足の負担軽減になることは間違いなしであった。下宿生活を始めた最初の頃は車を運転して道に迷いとんでもない所まで行ってしまったこともあったが、地図とガソリンスタンドで道を尋ねたりしてアメリカでの生活に早く溶け込めるよう努力した。通勤も10~15kmほどを快適に運転することが出来た。左ハンドル、右側通行にもすぐ慣れることが出来た。まさに私の足となってくれた“車”のお蔭で遠くのスーパーに買い物に行くことも出来たし、体力的にも日常生活を維持する上においても大いに助かった。

毎日“車”を通勤・買い物に利用しているうちに、アメリカでの交通ルールについて日本でも手本にしたいことが幾つか見つかった。ここで2点ほど例を上げておきたい。

まず1点として、信号のない交差点などで車の進行についての譲り合いのルールである。一方の車が交差点を横切った後は必ず反対側の車が横切っていくというルールである。必ず交互に通過するという方式がどこでも守られているのには感心した。日本で通常見られるように一方の車が次々と通過し途切れるまで一方向の車の通行が優先されるというようなことは絶対になかった。互いに譲り合うというルールは見習うべきである。

2点目はスクールバスに対する後続車の対応である。オレンジ色のスクールバスが対向2車線の前方で児童が乗り降りするために停車しているとき、後続車は反対車線に飛び出して追い抜くことは絶対にしないというルールである。スクールバスが発進するまでその後ろで停車して待つことになっているらしい。日本では反対車線の様子を身を乗り出して確認し、車が来ないことを確認すると急いで追い越して行くことになる。もし停車して待機したりすると自分の車の後ろの車が「何をもたもたしているのだ」と云わんばかりに2台とも追い越して行く場合さえある。事故防止のために「運転には余裕を」の教訓にしたい。

話は変わって、毎年お盆が近くなると2人の姉を私の愛車プリウスに乗せて岐阜県高山市にある我が家の墓参りに行くことにしている。道のりは名古屋市東区の東片端ICから名古屋高速にのり小牧北で降り国道41号線を走り美濃加茂市の長姉の家まで約1時間。ひき続いて美濃加茂ICから東海北陸道を走り高

山市へ1.5時間弱のドライブである。往復約340kmになる。私の父母は明治生まれであり我が家の墓には両親はもとより祖父とその家族も納骨されているので100年以上は軽く経過している。従って墓を建立した年月日などは殆んど消えかかっている。石塔の表面には「倶会一処」の「倶会」の二文字だけが独特の書体で刻まれている。私はこの書体が大変気に入っている。高山市のメイン通りである安川通りを過ぎ山手に入ると素玄寺というお寺がある。その裏山に100基は超える石塔が並ぶ墓地があり、わが家の墓はその中にある。もう40年近く毎年先祖の供養を続けてきたことになる。ただ、この墓地に到達するには急な坂道をしばらく登って行かなくてはならず、私の足で徒歩で行き着くことはまず不可能である。しかし車なら墓地のたもとまで、今は80歳を過ぎる姉たちも乗せて行くことが出来るのである。まさに私の足となってくれた“車”に感謝し、永年に渡り墓参が成し遂げられたことの喜びを感じているのである。

現在75歳以上の高齢者は運転免許を更新する時にはあらかじめ各県の公安委員会が行っている講習会を受講して、種々の適性検査・身体検査などを受け「高齢者講習終了証明書」を発行してもらわなくてはならない。私は平成22年と25年の2回この講習をすでに受講している。3年ごとであるので来年(平成28年)の免許更新時にまたこの講習を受けなければならない。高齢者講習手数料6,000円を支払い自動車学校で受講するわけであるがその内容は、認知機能検査(記憶力、判断力)、視力(通常視力、動体視力、夜間視力、右目・左目の視野)、運転適性診断(アクセル、ブレーキ、ハンドルなどの操作)などである。午後1時から4時頃までの講習である。我が国の制度として高齢者に対してこのような講習を行うことは、高齢者の事故防止のためにも必要であり大賛成である。来年講習を受けるとき私は80歳になっている。免許証を返上すれば私の大切な足“車”を失い生活環境の縮小を招くことになる。だからといって、免許証を再取得した時は安全運転が絶対条件でなければならない。とにかくどちらにすかは来年の講習会の結果と相談することにしよう。

(名古屋大学名誉教授)